

# 世界の現在性について

——物個体の数的同一性が教えること——

伊 佐 敷 隆 弘

## 概 要

この論文は形而上学（世界の究極の構造に関する学）に属する。物個体が変化の前後を貫いて数的に同一であることは「変化」概念が成り立つために必要である。また、物個体が行為の最中に数的に同一であることは、「意図→行為→結果」という行為の構造が成り立つために必要である。これらの数的同一性は時間を貫く同一性でもあるが、その際、「時間の線イメージ」を前提すべきでない。物個体の「過去」について語る（過去物語）によって「過去」が出現するが、行為の最中は、物個体は眼前に存在し続け「過去」は出現しない。それゆえ、過去物語抜きに行為をおこなう際、時間は経過するが、過去への移行は生じず、世界は同時性・現在性の中にある。したがって、飛鳥時代に作られた法隆寺の柱に私が今触れるとき、飛鳥時代と今とは同時性・現在性の中にある。このように、世界は、時間的に広がりつつも、ひとつの世界として、同時性・現在性の中にある。

## I 変化における物個体の数的同一性

世界には変化（change）が満ちあふれている。毎朝近所を散歩すると、梅の蕾が少しずつ大きくなり、やがて満開となって鮮やかな紅い花を咲かせるようすを目撃できる。（これは性質の変化である。）また、一羽の小鳥が空を横切って森の向こうへ飛んでいくのを見かけることもある。（これは移動だが、移動とは位置の変化である。）小鳥の飛行は数秒間で完了するが、梅の開花という変化は数週間かかる。変化の中にはもっと長い時間を必要とするものもある。たとえば、幼児だった私の息子は成長して大人になったが、数十年という時間がかかった。（これは性質の変化である。）また、地球表面のプレートは数万年かけて大陸を移動させる。（これは位置の変化である。）このように、世界には、さまざまな時間の幅を持つさまざまな変化が満ちあふれている。

しかし、これらのさまざまな変化にはひとつの共通点がある。それは「変化の前後を通じて同一であるような何か」が必ず存在している」という共通点である。梅が開花するとき、同じひとつの蕾が膨らみ、中から紅い花びらが出てくる。小鳥が飛ぶとき、移動していくのは同じ一羽の小鳥である。もし数週間前のあの蕾と今眼前に見えるこの紅い花が別々の物であるなら、あの蕾とこの紅い花という別々のふ

たつの物が(別々の時点に)存在しているということであって、それは「変化」ではない。また、こちらに見えた小鳥と森の向こうに見えた小鳥が別々の小鳥であったら、「二羽の小鳥が異なる場所にいる」ということであって、それは「場所の移動」ではない。私の息子の成長や大陸の移動の場合も同様である。同じひとりの息子が成長し、同じひとつの大陸が移動するのである。

要するに、「変化」という概念が成り立つためには、変化の前後を通じて同一であるような何かすなわち変化の主体(subject of change)が必要である。言い直せば、変化が可能であるためには、(性質や位置が)変化したにもかかわらず同一性(identity)を保つ何かが必要なのである。

この「同一性」はもちろん「性質の同一性」「位置の同一性」のような「質的同一性(qualitative identity)」ではない。もし、そうだったら、「変化」や「移動」は不可能になってしまう。変化とは性質や位置が変わることなのだから、質的同一性が保たれることは不可能である。変化の前後を通じて保たれる「同一性」とは、「物個体 thing-individual (個物 individual) としての同一性」である。この同一性は「数的同一性(numerical identity)」とも呼ばれる。蕾も小鳥も息子も大陸も、変化の前後を通じて同じひとつの物個体である。つまり、変化によって質的同一性は失われるが、数的同一性は維持されるのである。

「あの蕾」と「今眼の前に見えるこの紅い花」が同一の物個体であって初めて「蕾が開いて紅い花に変化する」という事態が可能になる。要するに、「変化」という概念は、同一性(物個体の数的同一性)と差異性(difference, 質や位置の差異)の両方がそろって初めて成り立つ概念なのである<sup>1)</sup>。

## II 時間の線イメージを前提しない

しかし、ここで私にひとつの疑問が生じる。物個体が変化を貫いて同一のままにいられることは、世界に関して何を教えてくれるのか。このような疑問である。というのは、「変化しつつも同一のままにしている」ということは(ありふれた事態であるが)改めて考えると不思議な事態だからである。とりわけ、私の一生よりも長い時間を要する変化における「同一性」は不思議である。たとえば、奈良の法隆寺を訪ねると、飛鳥時代に作られた五重塔がある。その柱は1300年という歳月を経て、干からびている。しかし、この1300年という期間にわたる変化を貫いて、〈法隆寺五重塔の柱〉という数的に同一の物個体が存在している。つまり、飛鳥時代の人々が見て触ったのと同じひとつの柱を今私が見て触っている。飛鳥時代の人々はもはや死に絶えてしまって、ここにはいない。彼らが経験した大小様々な事件はもうすべて済んでしまった。飛鳥時代は遠い昔である。にもかかわらず、この柱は「同じ」柱のままである。時間を貫くこの「同一性」とは一体何であるのか。そして、それは世界について何を私たちに教えてくれるのか。

物個体の数的同一性とは、時間を貫く同一性すなわち通時的同一性(transtemporal identity)であ

<sup>1)</sup> 物個体の〈変化を貫く数的同一性〉については伊佐敷(2020)の第1節「変化には同一性が必要である」でも論じた。本論文と一部重なる箇所がある。

るから、それは、世界の時間的特性（temporal property）について何かを教えてくださいと期待できる。しかし、ここで注意しなければならないのは、「時間を貫く」と言う際に「時間（time）とは何であるか」を自明の前提にしないということである。とりわけ、時間を線イメージ（line image）で捉えることを前提すべきでない。たとえば、「1300年」や「数万年」という時間を数直線でイメージし、「1300より数万の方が数直線上で長い距離だから、1300年前より数万年前は遠い昔だ」というような推論は避けるべきである。というのは、物個体の数的同一性に関して数直線と時間には決定的な違いがあるからである。すなわち、数直線上の別の位置にある二つの点が同一の点であることは不可能であるのに対し、異なる二つの時点に同一の物個体が存在できることが〈時間を貫く数的同一性〉の特徴だからである。つまり、空間的位置の違いは差異性の原理であって、同一性の原理にはなりえない。それゆえ、「時間の線イメージ」はあくまでも比喩にすぎない。そして、喩えるもの（線）と喩えられるもの（時間）が何らかの性質を共有していることが、比喩が成り立つための必要条件であるが、両者がどんな性質を共有しているかは、比喩を根拠とするのでなく、別の根拠から明らかにしなければならない。要するに、比喩を論証の根拠にすることはできない。したがって、線（喩えるもの）の持つ性質から時間（喩えられるもの）の性質を導くことは誤謬推論になるのである<sup>2)</sup>。

そもそも我々は時間を直接に観察することはできない。直接に観察できるのは変化（蕾から花への変化、小鳥の位置の変化、息子の成長、大陸の移動など）だけである。なんらかの変化を観察することを通して初めて時間が経過したことを知ることができる。（もちろん自分の心の動きを感じることで時間の経過を知ることもあるが、その場合も「心の動き」という変化がそこには生じている。）

要するに、物個体の〈時間を貫く数的同一性〉について考える際、「時間とは何であるか」を自明視してはならないのである。

### Ⅲ 行為における物個体の数的同一性

物個体の数的同一性が必要なのは「変化」だけではない。人間が物個体に働きかける行為（action）をおこなう場合にも物個体の数的同一性が必要である。

たとえば、私が眼の前の梅の蕾を摘んだとしよう。この場合、枝についている状態の蕾と枝から離れて私の手の中にある蕾は、もちろん数的に同一の蕾である。枝についていたあの蕾を摘んだのだから、今手の中にあるこの蕾はあの蕾と同じひとつの蕾である。

しかし、蕾は、もし摘まれずに枝に留まっていたなら、少しずつ変化してやがて梅の花になったはず

<sup>2)</sup> 英語圏の時間の哲学は McTaggart (1908) や McTaggart (1927) で提起された土俵の上でおこなわれてきた。McTaggart によれば、「時間の流れ」とは、「過去・現在・未来」という特性から構成される A 系列と「以前・以後」という関係から構成される B 系列という二つの時間系列が互いにずれていくことである。その後、A 系列の実在性に関して、それを肯定する A 論者（たとえば Tooley 1997）と否定する B 論者（たとえば Mellor 1981）の間で論争が繰り返されたが、この論争の前提となっている「時間を系列（すなわち線イメージ）で捉える」こと自体は問われて来なかった。時間の線イメージに対する筆者の批判は伊佐敷（2016）も参照されたい。

だ。この変化は蕾をじっと見つめていても見えないくらい遅い変化である。しかし、低速度撮影<sup>3)</sup>をすると蕾が開花するようすを見ることができ、変化していることは間違いない。そもそも変化の速さに関する人間の知覚能力には限界がある。たとえば、時計の秒針の動きは眼に見えるが、時針の動きは眼に見えない。時針は動いているはずだが、その速さは人間の知覚能力の限界よりも遅すぎるせいで、動いているようには見えない。同様に、梅の蕾も人間の眼に見えないくらいの速さでゆっくりと変化しているはずである。そうでなければ、蕾は開花できない。とすれば、私が眼の前の梅の蕾を摘む最中にも蕾は変化している可能性が大きい<sup>4)</sup>。ただ、その変化の速さは人間の知覚できる速さよりも遅いから、変化に気づくことはできない。時計の時針の動きが見えないのと同様である。

どんな行為も実行するためには時間がかかる。蕾を摘むのにも数秒かかる。しかし、その時間の間に行為の対象がたとえ変化していても、当該対象は数的に同一の物個体である。枝についていたあの蕾と今私の手の中にあるこの蕾は数的に同一の物個体である。そうでなければ、私はあの蕾を摘んだことにならない。私は「枝についているあの蕾を摘もう」と意図し、そして、実際にその蕾を摘み、その結果、今私の手の中にこの蕾がある。ここでの意図と行為と結果は、同一の物個体を対象としている。そうでなければ、私の行為は私の意図の実現ではないことになってしまう。すなわち、「あの蕾を摘む」という私の行為は、「あの蕾を摘もう」という私の意図の実現ではないことになってしまう。また、対象が数的に同一でなければ、行為の結果は私の行為が産み出したものではないことになってしまう。すなわち、「今私の手の中にこの蕾がある」という状態は「あの蕾を摘む」という私の行為が産み出した結果ではないことになってしまう。要するに、物個体の数的同一性は、行為が「意図→行為→結果」という構造を持つために必要なのである。このように、物個体の数的同一性は〈変化を貫く数的同一性〉であるとともに〈行為を貫く数的同一性〉でもある。

このことは「変化している」と通常思われなような物個体（たとえばボールペン）に関わる行為についても同様である。私がボールペンをペンケースから取り出す場合、ペンケースの中にあつたそのボールペンと、今私の手の中にあるこのボールペンの数的同一性を疑うことは一切ない。しかし、ボールペンも数千年の時間間隔で観察すれば、朽ち果てていくから、私がこのボールペンをペンケースから取り出す数秒の間にも、気づかれない程の速度でゆっくり朽ちているはずである。この点で、開花する蕾とボールペンの間に違いはない。そして、蕾を摘む行為の場合と同様に、「ボールペンをペンケースから取り出す」という行為の持つ「意図→行為→結果」という構造が成り立つために、ボールペンという物個体の数的同一性がやはり必要である。

さらに、他人と一緒に起こす行為の場合、物個体の数的同一性が前提されていることは一層明らかである。たとえば、私があなたにボールペンを手渡す場合、私の手の中にあつたボールペンと今あなた

3) 低速度撮影とは、1分間に1コマというように間隔を開けて撮影したものを上映することによって、撮影対象の変化を速く見えるようにする撮影方法である。この撮影方法により、数日かかる蕾の開花を数分で見ることができる。

4) 「可能性が大きい」というふうに留保したのは、蕾が常に変化しているのではなく、一日の内の決まった時間（たとえば一定の温度以上のとき）だけ変化している場合、摘んでいる最中はまったく変化していない可能性もゼロではないからである。

の手の中にあるボールペンとは数的に同一である。この数的同一性がなければ、「そのボールペンを私に手渡してくれ」というあなたの注文に私が答えることは不可能になる。一般的に言って、何らかの物個体が人から人へ手渡される時、当該物個体の数的同一性は、ふたりの一連の行為が「当該物個体の受け渡し」であるためには絶対に必要なことである。

このように、人間が物個体に働きかける行為をおこなう場合、物個体の数的同一性が必要なのである<sup>5)</sup>。

#### IV 時間経過と「過去への移行」の区別

ここまでの議論によって、「変化」や「行為」という概念は物個体の数的同一性を前提としていることが明らかになった。すなわち、「変化」が可能であるためには変化の主体としての物個体の数的同一性が必要であり、行為の持つ「意図→行為→結果」という構造が可能であるためには、意図・行為・結果が関わる対象である物個体の数的同一性が必要である。

そして、変化も行為も時間を要するから、この数的同一性は時間を貫く同一性であることも明らかになった。では、前述の〈法隆寺五重塔の柱〉のように人の一生よりも長い時間を貫いて数的同一性を保っている物個体について、何が言えるかを考察しよう。

今私の目の前に干からびた柱がある。この柱が建てられたときは、おそらくみずみずしい柱だっただろう。長い年月の間に「干からびる」という性質の変化をこうむったが、にもかかわらず数的には同一の柱である。これは〈変化を貫く数的同一性〉である。

では、この柱を何らかの行為の対象として捉えることはできないか。それも他人と一緒におこなう行為の対象として捉えることはできないか。私があなたにボールペンを手渡す場合、この行為を貫いてボールペンは数的に同一である。これは〈行為を貫く数的同一性〉である。この柱をここに建てたのは飛鳥時代の職人たちだ。そして、今その柱に触れるのは私だ。職人たちはもういない。しかし、この柱は、私からあなたに手渡されたボールペンと同様に、職人たちから私に今手渡されたのだ。このように考えることはできないか。「ひとつの行為に1300年かかる」と考えるのはあまりにも荒唐無稽だろうか。決してそうではない。その理由を本節と次の第V節で述べよう。

通常、人は行為の最中、「過去」を意識しない。これに対し、私があなたにボールペンを手渡した場合、私の手の中にボールペンがあったのは「厳密に言えばボールペンが手渡されるよりも過去だ」と考える人がいるかもしれない。「ボールペンを手渡すのには、わずかだが、時間がかかる。時間がかかる以上、手の中にボールペンがあったのは、わずかだが過去だ」という理屈である。しかし、私からあなたへボールペンが手渡される間、同一のボールペンが、「過去から現在にかけて存在している」のではなく、「目の前に存在し続けている」ことを私もあなたも疑わないのではないか。「改めて考えると過去だ」と思

<sup>5)</sup> 物個体の〈行為を貫く数的同一性〉については伊佐敷（2020）の第2節「行為には物個体の同一性が前提されている」でも論じた。本論文と一部重なる箇所がある。

うのであって、行為の最中に「同一のボールペンが過去から現在にかけて存在している」とは決して思っていないだろう。もう一つの例をあげれば、今あなたが見ているこの論文のこのページも過去から現在にかけて存在しているのだろうか。むしろ、読んでいる最中ずっと眼前に存在し続けているのではないか。この〈行為を貫く数的同一性〉は、確かに〈時間を貫く数的同一性〉であるが、だからと言って、「過去から現在にかけての数的同一性」である必要はない。

時間の線イメージを前提するなら、時間経過は「線上を点が移動する」というイメージになるかもしれない。このイメージのもとでは「時間が経過する→時間直線上を点が移動する→現在は過去へ移行する」と推論したくなるだろう。しかし、第Ⅱ節で前述したように「時間の線イメージ」は比喩にすぎず、論証の根拠にすべきではない。

もし、あくまで「時間の線イメージ」にこだわるなら、私たちは、「言わば『幅を持つ現在』の中でボールペンを手渡し、このページを読んでいる」と言えるかもしれない。しかし「幅」という表現自体が「線イメージ」を前提とする比喩であることに注意すべきである。いずれにしても、「ボールペンが眼の間に存在し続けている」こと、および、「時間が経過している」という事実留まるべきであり、これらの事実「時間の線イメージ」を付け加えて推論をすべきではない。すなわち、「眼前にボールペンが存在し続けている」プラス「時間が経過している」ということから、「このボールペンは過去から現在にかけて存在し続けたのだ」と推論することは、時間の線イメージ抜きにはできない推論なのである。

「改めて考えると、過去になっている」というのは、行為の最中ではなく、行為の後に、すなわち、事後的に考えた場合の推論であって、行為の最中に「現在から過去への移行」が現れることはない。事後的に現れる「現在から過去への移行」と、行為の最中の「時間は経過するが、現在から過去への移行は現れない」という違いはきわめて重要な違いである。時間の線イメージに幻惑されて、この違いを見過ぎさないようにしよう<sup>6)</sup>。

## V 同時性・現在性の中にあるものとしての世界

しかし、ボールペンを手渡す場合と違って、五重塔を前にしたとき私たちは「過去」を意識するのではないか。確かに、私たちは五重塔の古さを語り、その歴史を語る。そのとき、飛鳥時代という「過去」を意識する。そして、私たちは「過去」という時間の特徴について、「過去は失われる」とか、「過去は過ぎ去って、どこにもない」としばしば言う。

しかし、一般に、物个体について語ることと、物个体を対象とする行為をおこなうこととは別のことである。とりわけ、物个体の「過去」について語ること（過去物語）は、物个体を対象とする行為をおこなうこととは別のことであり、前者（過去物語）は後者（行為）にとって必要ではない。私があなたにボールペンを手渡した場合、事後的に「私の手の中にボールペンがあったのは数秒前の過去だ」と言

<sup>6)</sup> 両者の違いについては、伊佐敷（2010）の第三章「現在は瞬間か」も参照されたい。

うこと（つまり、このボールペンについての過去物語をすること）は確かに可能である。しかし、私があなたにボールペンを手渡すという数秒間の行為の最中、そのような過去物語は私にもあなたにも一切意識されない。すなわち、この行為がなされる最中、この物個体は眼前において〈行為を貫く数的同一性〉を保っているのであって、時間は経過するが、現在から過去への移行はそこに生じていない。したがって、この物個体の〈行為を貫く数的同一性〉は、或る同時性（simultaneity）あるいは現在性（presentness）の中において保たれている。というのは、「現在から過去への移行」が生じていない以上、「現在性・同時性の中にある」と考えてよいからである。このように、私があなたにボールペンを手渡す際、このボールペンという物個体は同時性・現在性の中において〈行為を貫く数的同一性〉を保っている。

しかし、ボールペンを手渡す場合と違って、「五重塔の柱が職人たちから私に今手渡される」と考えることは無理だと思われるかもしれない。しかし、人間の寿命や知覚能力が現状と異なる場合を想定してみよう。もし、人間の寿命がはるかに長く何千年も生きることができ、そして、「梅の蕾が開花する」というような数週間におよぶ変化を「一瞬の変化」と感じるような知覚能力を人間が持っていたら、どうなるだろうか。そのとき、現状の寿命や知覚能力を持つ私たちにとってのボールペンの手渡しの場合と同様に、この柱の〈行為を貫く数的同一性〉は同時性・現在性の中において保たれるのではないか。

つまり、人間の寿命や知覚能力などの偶然的事情が許せば、飛鳥時代と今とは同時性・現在性の中にあるのである。すなわち、〈私の手の中にボールペンがある数秒前〉と〈ボールペンがあなたの手の中に移った今〉とが同時性・現在性の中にあるのと同様に、〈職人たちが五重塔の柱を作った飛鳥時代〉と〈私が同じこの柱に触れる今〉とが同時性・現在性の中にあるのである。

では、「同時性・現在性の中にある」というこの可能性は何に由来するのか。それは世界の時間的特性に、すなわち世界の通時的数的同一性に由来すると考えられる。「世界の通時的数的同一性」とは、世界は時間的に広がりつつもひとつの世界だということである。〈飛鳥時代の職人が触れたこの柱〉と〈今私が触れるこの柱〉とが変化を貫いて数的にひとつの同じ物個体であるように、〈飛鳥時代の職人が触れたこの柱が存在している世界〉と〈今私が触れたこの柱が存在している世界〉とは数的にひとつの同じ世界なのである。それゆえ、人間の寿命や知覚能力などの偶然的事情が許せば、〈飛鳥時代〉と〈今〉とは同時性・現在性の中にあることが可能になるのである。

そもそもひとつの柱を〈飛鳥時代の柱〉と〈今の柱〉というふうに、あたかもふたつの柱があるかのように考えるのは、ひとつの物個体をいたずらに二重化することである。もしそのような二重化が許されるなら、一年ごと、あるいは、一秒ごとに別々の柱が存在することになってしまうだろう。また、もしそのような二重化が許されるなら、私があなたにボールペンを手渡す場合も、〈私の手の中にある1秒前のボールペン〉と〈あなたの手の中にある今のボールペン〉とが別々のボールペンだということになってしまい、さらに、〈私の手の中にボールペンがある1秒前の世界〉と〈あなたの手の中にボールペンがある今の世界〉とが別々の世界だということになってしまうだろう。

このような二重化の行き着く先は、物個体と世界の無限の多重化である。というのは、二重化を許せ

ば、ふたつのボールペンの他に〈私の手とあなたの手が同時に触れている0.5秒前のボールペン〉という別の物個体が存在することになってしまい、〈0.4秒前のボールペン〉〈0.3秒前のボールペン〉〈0.2秒前のボールペン〉というように無数に多重化されてしまうからである。世界に関しても同様に、〈私の手の中にボールペンがある1秒前の世界〉と〈あなたの手の中にボールペンがある今の世界〉というふたつの世界の間さらに〈私の手とあなたの手が同時にボールペンに触れている0.5秒前の世界〉という別の世界が存在することになり、〈0.4秒前の世界〉〈0.3秒前の世界〉〈0.2秒前の世界〉というように、世界の多重化にはきりがないだろう。

私たちは行為の最中にこのような無数の世界を縦断して無数の物個体に関わっているだろうか。そうではあるまい。私たちは同じひとつの世界の中で同じひとつのボールペンを手渡すという行為をしているのである。

このように、行為の最中に物個体が〈行為を貫く通時的数的同一性〉を持ちうるのは、そもそも世界が通時的数的同一性を持っているからである。したがって、〈飛鳥時代〉と〈今〉とを別々の世界であるかのように考えることは、ひとつの世界をいたずらに二重化することである。飛鳥時代と今とは同じひとつの世界なのである。

しかし、確かに私たちは飛鳥時代を「遠い過去」と感じる。「飛鳥時代と今が同じひとつの世界だ」ということは信じがたいかもしれない。しかし、私たちが飛鳥時代を「遠い過去」と感じるのは、眼前の柱の「過去」について語るという営み、すなわち過去物語がおこなわれた後のことである。「法隆寺は聖徳太子によって創建された」「火災のあと再建された」「この柱は1300年前に職人たちによって建てられた」「そのころはみずみずしい柱だった」「そのあと、戦乱や火災があったが、この柱は無事だった」などの多くの過去物語が積み重ねられることによって、この柱が建てられた時が「遠い過去」に位置づけられるのである。つまり、「過去」は過去物語によって出現する<sup>7)</sup>のである。前述したように、私があるにボールペンを手渡す最中に「過去」は出現せず、「私の手の中にボールペンがあったのは数秒前の過去だ」と言うこと（すなわち過去物語をすること）によってはじめて事後的に「現在から過去への移行」が現れるのだが、この点に関して五重塔の柱の場合も同様だということである。時間の線イメージを前提しなければ、このように考えることは不合理ではない。

したがって、現状の寿命と知覚能力を持つ私たちであっても、過去物語抜きに眼前のこの柱に関わるなら、飛鳥時代と今とは、「現状と異なる寿命や知覚能力を私たちが持つ」という想定のもとでの単なる可能性としてでなく、) 実際に同時性・現在性のなかにあることに気づくだろう。そして、そのとき、私たちはこの柱を、飛鳥時代の職人たちから自分に今手渡されているものとして感じるだろう。

このことを私は次のような詩もどきの文章で表したことがある<sup>8)</sup>。

<sup>7)</sup> そのためには「出来事個体 (event-individual)」というカテゴリーが必要であるが、この点については伊佐敷 (2010) を参照されたい。

<sup>8)</sup> 伊佐敷 (2010) pp. 231-232 の注 16。

古寺の柱

伊佐敷 隆弘

古びた寺の干からびた柱に私は触れる。  
いにしえのその人がこの柱に触れるのを私は感じる。  
私からその人に手渡される何かのように  
干からびた柱は私とその人の前にある。

ひとつの世界の中にひとつの柱がある。

世の人が物語をこしらえることによって時は流れていく。  
けれど  
私が柱に触れるとき物語は消え失せ  
どこへも向かわない時間の中で私とその人は柱に触れる。

「古びた寺」とは法隆寺のことであり、「いにしえのその人」とは職人のことである。この柱は、私からその人に手渡される何か（たとえばボールペン）と同様に、同時性・現在性の中で、その人から私に手渡される。第2連の「ひとつの世界の中にひとつの柱がある」とは、「〈時間的に広がりつつ同時性・現在性の内にあるひとつの世界〉の中に、〈変化や行為を貫いて数的に同一である物個体〉が存在している」ということを表す。第3連の「世の人が物語をこしらえることによって時は流れていく」とは、人間が「過去」について物語ることによって、「現在が過去になる」という「時の流れ」が初めて現れるということである。そして、最後の「どこへも向かわない時間」とは、「現在・過去・未来の区別以前の時間」すなわち「同時性・現在性が成り立つ時間」のことである。この時間の中で物個体は数的に同一であり続ける。

要するに、〈物個体が変化や行為を貫いて数的に同一であること〉は、〈世界が、時間的に広がりつつも、ひとつの世界として、同時性・現在性の中にあること〉を私たちに教えてくれる。すなわち、〈物個体の数的同一性〉は〈世界の現在性〉を教えてくれるのである。

付 記

筆者の形而上学研究における本論文の位置づけについて付記する。

物個体がどのように個体化されるかということ自体は、人間の寿命や知覚能力などの偶然的事情に左右される。たとえば、「数週間かかる梅の開花を一瞬だと感じる」知覚能力を人間が持つようになった場合、今私たちが知覚している変化のうちのいくつかは「速すぎて知覚できない変化」になるかもしれない。つまり、時間空間的にどの範囲を「ひとつの物個体」とするかは、人間に関する偶然的事情に左

右される。

そして、物個体が個体化される以前の世界とは、「何であるか」抜きの「ここにある」ということである。「何抜きのある」としての世界は（偶然的事情に左右されず）常に眼前にある。世界は時間的に広がりつつも同時性・現在性の中にある。人間は、そのような世界に意味付けすることによって、「物個体」および「変化」という概念を生み出し、行為をおこなう。そして、さらに、「出来事個体」カテゴリーや過去物語によって、「過去」「時間」という概念を生み出す。このようにして人間は世界を飼い馴らす。しかし、生きているとは、意味抜きの存在（何抜きのある）を感じているということであり、意味によって曇らされていない眼には、意味抜きの存在としての世界が見える。

要するに、①個体化以前の世界（「何抜きのある」同時性・現在性の中にある世界）→②物個体が存在する世界（「変化」や「行為」が可能になる世界）→③過去物語によって時間が流れ出す世界（「現在」「過去」「未来」が区別される世界）、というように世界は構造化されている。私たちが普段生きているのは、複雑に構造化された③の世界であるが、哲学とは、世界の構造化を逆にたどり、構造化以前の始原にある世界の無垢の姿を見出そうとする試みである。本論文では②の世界からさかのぼることによって①の世界の「現在性（同時性）」という特徴を明らかにした<sup>9)</sup>。

つまり、先行研究に対する本論文の新しさは、「①の世界→②の世界→③の世界」という世界の構造化を捉えた点、および、そのことによって「飛鳥時代と今とが同時性の中にある」（すなわち「世界の現在性」）という主張に説得力を与えた点にある<sup>10)</sup>。

## 文献表

- Camus, Albert (1942) *Le Mythe de Sisyphe: Essai sur L'absurde*, Gallimard. [邦訳:アルベール・カミュ『シーシュポスの神話』清水徹訳, 新潮文庫, 1969年.]
- 伊佐敷隆弘 (2010) 『時間様相の形而上学』勁草書房.
- 伊佐敷隆弘 (2016) 「時間の線イメージについて」日本大学哲学会『精神科学』vol. 54, pp. 1-20.
- 伊佐敷隆弘 (2020) 「物個体の同一性と名辞以前の世界について」『哲学を創造する ひとおもい 2』東信堂, pp. 188-205.
- 伊佐敷隆弘 (2023) 「中原中也の詩を哲学的に読む——言語の限界への挑戦として——」日本大学経済学部『研究紀要』vol. 96, pp. 67-82.
- James, William (1911) *Some Problems of Philosophy: A Beginning of an Introduction to Philosophy*, Longmans, Green & Co. [邦訳:ウィリアム・ジェイムズ『哲学の諸問題』上山春平訳, 日本教文社, 2015]

<sup>9)</sup> ①の世界の「個体化以前（何抜きのある）」という特徴については伊佐敷 (2020) と伊佐敷 (2023) でも述べたが、「世界の現在性」は明らかになっていなかった。すなわち、伊佐敷 (2020) では、James (1911) の「概念 (concept)」と「パーセプト (percept)」の区別、Sartre (1938) の「吐き気 (nausée)」, Camus (1942) の「不条理 (absurde)」, 長田 (2000) の詩などを手がかりに、①の世界の「個体化以前（何抜きのある）」という特徴について述べ、中原 (2003) の言う「名辞以前の世界」は「個体化以前の世界」であると主張した。伊佐敷 (2023) では、中原中也の3つの詩から、「今ここで生きられている肉体」、「今ここに開けているこの視点としての私」、「何であるか」や『いかにあるか』から区別された「あるということ」それ自体を読み取る試みをおこなった。

また、伊佐敷 (2010) 第一章で「世界の通時的数的同一性」に触れたが、本論文ではさらに踏み込んで「世界の現在性（同時性）」を主張した。この点が筆者の形而上学研究における前進である。

<sup>10)</sup> 注2であげたA論者やB論者たちはもちろん、注9であげたJamesたちにも世界の構造化を「①→②→③」というように捉える視点はなく、それゆえ、彼らには「世界の現在性（同時性）」という視点は無い。

年.]

McTaggart, J. E. (1908) "The Unreality of Time," *Mind*, vol. 17, pp. 457-474. [邦訳：ジョン・エリス・マクタガート『時間の非実在性』永井均訳，講談社学術文庫，2017年.]

McTaggart, J. E. (1927) *The Nature of Existence*, Cambridge University Press, 1988.

Mellor, D. H. (1981) *Real Time*, Cambridge University Press.

中原中也（2003）「芸術論覚え書」『新編 中原中也全集 第四巻 評論・小説 本文篇』角川書店，pp. 139-153.

長田弘（2000）「午後の透明さについて」『一日の終わりの詩集』みすず書房，pp. 58-60.

Sartre, Jean-Paul (1938) *La Nausée*, Gallimard. [邦訳：ジャン-ポール・サルトル『嘔吐』鈴木道彦訳，人文書院，2010年.]

Tooley, Michael (1997) *Time, Tense, and Causation*, Oxford University Press.

